

[498] “人生天地之间……” ——大団円（三） 『阿Q正伝』を読む（21）

(81) “几乎‘魂飞魄散’了”

阿Qが何も言うことはないかと答えると、長衣の男の一人が紙と筆を阿Qのところへ持ってきて、筆を彼の手に押しつけた。

阿Q这时很吃惊，几乎‘魂飞魄散’了：因为他的手和笔相关，这回是初次。（阿Qのこの時の驚きようは、ほとんど「魂も消えん」ばかりであった。なにしろ彼の手が筆と関係を持つのは、この時が初めてであったからだ。）

阿Qが筆をどう握ったものやわからないでいると、男は紙の一か所を指し示して、そこに署名させようとした。

(82) “我……我……不认得字”

「わ……わしは……字を知らねえです。」

阿Qは筆をわしづかみにして、恐る恐る恥ずかしそうに言った。

“那么，便宜你，画一个圆圈！”（じゃあ、何でもいい、マルを一つ描け！）

阿Qはマルを描こうとしたが、手が筆を握ったままブルブルふるえてとまらない。すると男は紙を地面に広げてくれた。

阿Q伏下去，使尽了平生的力画圆圈。（阿Qはかがみこんで、ありったけの力をふりしぼって、マルを描いた。）

(83) “这可恶的笔”

他生怕被人笑话，立志要画的圆，但这可恶的笔不但很沉重，并且不听话，刚刚一抖一抖的几乎要合缝，却又向外一耸，画成瓜子模样了。（人に笑われまいとして、まんまるく描こうと決心したのだが、この憎むべき筆は、重たいばかりか、彼の言うことを聞いてくれず、ブルブルふるえながらなんとか輪がつながりそうになった時、また外側に飛び出して、西瓜の種のような形になってしまった。）

阿Qは自分がまんまるく描けなかったことを恥ずかしく思ったが、男はそんなことには頓着する様子もなく、さっさと紙と筆を取り上げてしまった。すると、また何人もの男たちが彼をひたてて行って、格子戸の部屋へ押し込んだ。

(84) “‘行状’上的一个污点”

他第二次进了栅栏，倒也不十分懊恼。（彼はもう一度格子戸の中に押し込まれたが、別に苦しむ様子はなかった。）

ここに「もう一度」とした“第二次”がちょっと気になる。最初に部屋に押し込まれて、次に前回の訊問の後に押し込まれているから、今回は三度目のはずだが……。手元に角川文庫版増田渉訳は「二度目に」、岩波文庫版竹内好訳は「三度目に」改めている。後者の方がわかりやすい。

他以为人生天地之间，大约本来有时要抓进抓出，有时要在纸上画圆圈的，惟有圈而不圆，却是他“行状”上的一个污点。（彼は人としてこの世に生まれたからには、まあたまにはぶち込まれたり引っぱり出されたりするだろうし、またたまには紙の上にマルを描かされることもあるだろう。ただ、マルがまるくならなかったのは、どうも自分の「行状」の汚点だ、と考えた。）

2017/4/21